

笹ヶ峰の水伝説

坪井山水

正法寺が笹ヶ峰山頂に祀っている石土蔵王権現の前で山頂護摩を焚きに、毎年七月になると登っている。

登っていて気になることがある。丸山荘から紅



伊予池



土佐池

葉谷を登って鞍部に出て、小さな尾根の間の谷筋を西に進むが、すぐに筋が消える。向きを北に変えて大屋根を駆け上がる。上から見下ろすと段違い平行棒のような小さな尾根が作った谷筋であつた。山頂護摩を済ませて笹ヶ峰北面の新道を下るので、進路を西に取る。左下の彼方に笹が茂っていない小さな円形の裸地を見付ける。登りに見た小さな尾根の延長線が南側を縁取り、凹地に

なっている。雨水が集まるが水は干し上がっている。西黒森の南下の神鳴しの池と同じである。

少し進むと笹が窪んだ箇所東横を下る。窪地の南側が県境の分水嶺である。窪地を形成する北の盛り上がりも分水嶺である。この窪地に残った雪上でスキーをした話と共に、昔雨乞いをしていたとの話も聞いた。

笹ヶ峰は、県境の分水嶺の主要稜線の南と北にも分水嶺を持つ三重稜線と言う稀な地形である。天保十三年に西條藩が作った「西條誌」には、

「笹ヶ峰の）頂き伊予地と称する処あり。二、三間四方のくぼみなり。雨乞いに來る修験のものなせるよしにて旧はこの池に六、七寸圍いなる瓶を据え天水を蓄え、その水を取り帰り符を出し田野に立つ。その瓶、今は破れて数片かの窪に遺れり。これより一町ほど南に、土佐池というあり、これは、七・八間圍の窪にて、そこは土佐の国なり。すべて伊予土佐の分界、この峰の水流れを以て定め、峰より北を伊予とし、南を土佐という。」と書かれている。三重稜線が、土佐池と伊予池を作っていた。

話は変わるが、一宮神社の正月の若水を汲むので有名な葛淵が若水町にある。話は逆で、若水町は一宮神社の若水を汲んでいたのが、町名になつ

たのである。史跡葛淵の石碑には、一宮神社に關係のある神の泉として毎年正月七日の早暁、宮司がこの霊泉の水を汲み、この水を神に供し、この水を用いて神饌を調理すると記されている。更に、この泉は雨乞いの霊地とされ、ひでりの際は笹ヶ峰に登り、日月の池の神水を汲んで持ち帰り、この水を葛淵の神籠に捧げて祈念すれば直ちに雨を賜ると云われて、いよいよ農民の信仰を集めていたとも記されている。明らかに日月の池は、土佐池と伊予池を指している。

笹ヶ峰山頂の池と若水の淵とは、どんな因縁で繋がっているのだろうか。隠されていたのは、海と山を往復する神の世界観としての山の神と海の神の結婚である。それが農耕民の中に変容しながら受け継がれてきた。そして、海の神を失った山の神が、ひとり山と平野を往復する存在となった次第である。



葛淵

※ご寄稿頂いたのは別子銅山記念図書館専門員

坪井利一郎さんです。有難うございました。